

ウガンダで出会ったツアーディレクターとその家族。
実家の敷地に建築中の別棟にはツアーリストを受け入れる予定で、
ぜひウガンダ人と交流してほしいとのことだ。

魅力的な挑戦

MURAOOKOSHI





ツアーディレクターの実家に建築中の別棟の内部。
スタディツアーやホームステイで宿泊するツアー客のために準備を進めている。



ウガンダの首都、カンパラにあるナカセコ市場付近の雑踏。



ジョージ湖湖畔の村の子どもたち。外国人の筆者にも物おじする様子はない。



ブワンディ原生国立公園のゴリラ・トレッキングには、
地元の若者がポーターとして同行する。



クイーン・エリザベス国立公園のサバンナ・サファリで出合った野生動物。
気品があり、目を奪われる。



クイーン・エリザベス国立公園のボートサファリでは迫力満点のさまざまな野生動物を見ることができる。



ジョージ湖湖畔のローカルツーリズムに力を入れる村。
ツアー客を迎え、素顔のウガンダを知ってもらおうとしている。



地元のの人たちと一緒に手作りのバッグ。
市場に出向いて販売するまでを
ツアー客が体験できるよう計画している。



クイーン・エリザベス国立公園の宿泊施設、ムウェヤ・サファリ・ロッジの客室。



ムウェヤ・サファリ・ロッジのしゃれた食事。



「寄って行きたいところがある」。そう
言って現地ツアーディレクター（以下
TD）は笑みを浮かべた。アフリカ東部
のウガンダを訪れ、同国屈指の観光ス
ポットであるクイーン・エリザベス国立
公園の入門ゲートに近づいたときのこと
である。「貴重な思い出になるよ」と自
信満々だ。車は舗装された一本道を逸れ、
でこぼこの更地のモニュメントの前に停
まる。モニュメントには「UGANDA
EQUATOR」と表示されている。
EQUATOR——赤道だ！ TDは
私の興奮にご満悦。彼は飾らない人柄と
仕事熱心さと、何よりもウガンダへの愛
情に溢れた人物だ。

ウガンダは国土の美しさから「アフリ
カの真珠」と称えられている。土地の大半
は平均標高が1200メートルに位置し
ていて、赤道の横断する国と聞いてイメー
ジするより過ごしやすい気候だ。世界第
3位の広さのビクトリア湖に面し、豊か
で多様な自然に恵まれた野生動物の王国
であり、世界各国からツアーリストが集う。
クイーン・エリザベス国立公園では
ボートクルーズやサファリカーで大自然
を存分に満喫し、立ち寄ったホテルの充
実した設備と洗練されたもてなしも見事
だった。その後TDは公園内のジョージ
湖畔の村に案内してくれた。牧畜と漁
業と畑作で細々と生計を立てているウガ
ンダの典型的な田舎の村だ。彼はこの村

をツアーに組み込み、村人とふれあい、
素顔のウガンダを知る機会になればと
願っている。多くのツアーリストがこの国
立公園を訪れるのだから、地元で貢献で
きるチャンスになるはずとTDは力説す
る。村人は生活が潤うだけでなく、外国
人と交流すると視野も広がり、次のス
テップを考えるようになるという。自分
たちに何ができるのかと知恵を絞り、受
け継いできた伝統・文化を再評価する機
運が生まれることにも期待しているのだ。
「MURAKOSHI（村おこし）」を
始めるのさ。日本語が飛び出したTD
は、実は日本で数年間企業に勤めた経験
を持っている。

ブウィンディ原生国立公園のトレッキ
ングではゴリラと、キバレ国立公園では
チンパンジーと出会い、ウガンダの大自
然に私は魅了された。パークレンジャー
たちの豊富な知識や細心の仕事ぶり、そ
してトレッキングでツアーリストの荷物を
運ぶポーターの若者たちのひたむきさに
感服した。山村の若者たちにとっては現
金収入を得られる大切な機会だ。ウガン
ダの、特に産業に乏しい地方部では観光
は重要なビジネスの一つとなっている。

ブウィンディ原生国立公園から遠くな
いTDの実家に伺った。TDは、実家の
ある山村に学校を開設したメンバーの一
人でもある。学校の充実がウガンダの未
来に羽ばたく子どもたちには欠かせない

と信じている。さらに彼は実家の敷地
内にツアーリストが宿泊可能な別棟を建
設していた。地元の生活や伝統・文化・
産業を学ぶ体験型ツアーや、ホームス
テイやスタディツアーの事業を本格化
させ、その収益は村の生活向上やインフ
ラの整備、そして学校の円滑な運営の
ための資金に役立てたいと考えている。
「MURAKOSHIだよ、自分の故
郷で」とTDは顔をほころばす。「学校
は開放できるから、子どもたちともぜひ
交流してほしい」。思わず「日本の学校
と交流するのも面白いね。夏休みにここ
に滞在してもらえばいい」と口を挟むと、
「SUBARASHII！」と喜んだ。

首都カンバラへの帰路で、ふたたび赤
道を跨いだ。そこでは赤道の上に設営さ
れたカフェが営業していた。このカフェは
赤道を活用した「MURAKOSHI」
なのか。外国人ツアーリストもよく立ち寄
るとカフェのマネジャーは胸を張り、そ
の日は行楽がてらドライブしてきたウガ
ンダ人たちにぎわっていた。TDが目
指す「MURAKOSHI」も成功し
てほしいと願った。

木下貴史(きのした たかし)

神奈川県横浜市在住。東海大学文学部卒業。アフリカ取材
に力を入れ、1か月歩き回ったカメルーンをはじめ、訪れた
国は13か国。ネルソン・マンデラの足跡をたどるため、南アフリ
カには7度訪れている。昨年末には横浜市国際局のイベン
トで、マンデラの軌跡を紹介する写真展を開催して好評を
博した。フェイスブック検索「木下貴史」。



赤道の真上で
営業しているカフェ。